

地域スポーツ集団のコミュニティ・モラルと コミュニティ活動の関連性に関する研究

金子守男・李 真・韓 光 領

The study of relationship between community morale and community activities of local sport groups

Morio Kaneko, Zhen Li, Kwangleong Han

The purpose of this study was to analyze relationship between community morale and community activities of local sport group in three cities. The subjects were members of 144 recreational softball teams. The total number of them was about 2400 men and women, aged from twenties to fifties.

In this study, community activities classified into formal community activities and informal community activities, and analyzed their relationship with community morale. These community activities were expressed by following variables.

Formal community activities:1)Cooperation frequency to the Annual event of community of team, 2)Frequency of team event/year.

Informal community activities:1)Degree of voluntary cooperation to the neighborhood activities of team member, 2)Degree of voluntary cooperation to the team activities of team member.

The results were as follow:

1. In relationship between community morale and formal community activities, plus correlation was recognized between community morale and frequency of team event/year in two cities, and minus correlation was recognized between cooperation frequency to the Annual event of community of the team and frequency of team event/year in two cities.
2. In relationship between community morale and informal community activities, plus correlation was between three variables in all cities.

はじめに

地域スポーツ活動が、地域住民のスポーツ活動に対する欲求を充足させるために発展してきたことはいうまでもない。しかしながらこの活動は、ただ単に、参加者個々人のスポーツ活動への欲求を満たすことのみで終始するのではなく、参加者に親睦や交流の場をも提供する。従って、地域集団編成の機会をも提供している、と

も考えられる。

地域住民が、仮に、こうした側面から地域スポーツ活動を捉え、これに賛同の意を表している場合、この活動の手段的な意味合いが強化される。つまり、地域住民は、スポーツ活動そのものを楽しむという理由によって活動に参加することのみならず、地域集団編成のため、あるいは地域社会形成の協力をするためという手段的な理由によって、活動に参加するようになり、

このような目的を追求していく過程に充足感を感じるようになるということである。

これまで、地域スポーツ活動の、こうした手段的側面に着目して行われてきた研究に、まず、海老原¹⁾(1981)、中島⁹⁾(1983)の研究をあげることができる。これらの研究では、地域スポーツ参加者の近隣交流、地域の年中行事への協力、コミュニティ・モラル(地域住民の士気)を調査し、この3者がポジティブな関係を有しているという1つの仮説を提示した。また、川西⁹⁾(1985)は、地域住民の地域スポーツ活動への参加とコミュニティ・モラルの関連を分析し、地域のスポーツ行事の参加に関しては、両者の間にプラスの関係が認められたことを報告した。そして、国友⁹⁾(1987)は地域のスポーツ施設の利用者と非利用者、近隣にスポーツ活動を行う仲間がいる者といない者のコミュニティ・モラルを調査し、それぞれの両者の比較において、スポーツ施設の利用者や近隣にスポーツ活動を行う仲間を有する者のコミュニティ・モラルは、非利用者や仲間のいない者のそれより高いことを報告している。

先行研究を検討していくと、そこでは、コミュニティ・モラルを変数として扱っている研究が多く、このことは、地域住民のコミュニティ意識の形成がコミュニティ(地域共同体、地域社会)を形成していく際の重要な核となる、ということ的前提に調査・研究が進められてきたことを示唆するものである。

これまでコミュニティ・モラルとコミュニティ活動の関係を分析した研究は、川西の研究のみであるが、ここでも地域住民のコミュニティ・モラルとスポーツ参加との間の関連性の分析にとどまっている。こうしたことから、本研究では、コミュニティ活動を各種の地域年中行事、チーム年間行事、参加者の地域活動への協力、チーム運営の協力という多様な角度から捉え、これらとコミュニティ・モラルとの関係を分析することを主たる目的とした。

研究の目的

コミュニティ・モラルとは、地域住民の士気

を調査することを目的に、鈴木ら¹³⁾によって考案された12変数から構成される概念である。この概念は軍隊組織や産業組織におけるモラル概念を地域社会に適用したもので、例えば、尾高¹⁰⁾が指摘するように、モラルの高い職場集団ほど生産性は高い、という仮説を基に考案されたものである。従って、地域住民のコミュニティ・モラルの高い地域社会ほど、コミュニティ形成に有効であるという仮説が成り立つ。さらにこうした仮説は、地域社会の1単位である地域スポーツ集団にも適用が可能でなければならない。つまり、コミュニティ・モラルの高い地域スポーツ集団ほど、コミュニティ形成に有効であるという仮説である。

本研究では、以上の知見に基づき、地域スポーツ集団のコミュニティ・モラルの高さとコミュニティ形成の有効性、換言すれば、地域スポーツ集団のコミュニティ・モラルとコミュニティ活動の関係を分析することを目的とする。

研究の方法

1. 調査対象

本研究では地域集団の特性を満たすために、年齢、性別、学歴、職業の異なる近隣住民で構成される地域スポーツ集団を調査対象として選出した。調査票の回収状況は表1に示す。

2. 分析方法

本研究の分析に用いた変数は表2-1に示す。「コミュニティ・モラル」、チーム構成員の「地域活動への自主的協力度」及び「チーム運営への自主的協力度」についての調査は、チーム構成員に対して行い、チームの「地域行事への協力頻度」、「チーム年間行事数」についての調査は、チームの責任者に対して行った。

次に、個々の質問内容及び回答方法、そして分析方法を説明する。

1)「コミュニティ・モラル」は、次の12変数から構成される。

- ①地域外に外出し帰宅した時の安堵感
- ②地域社会に対するプライド

表 1 調査票の回収状況

調査期間	調査対象	配布数	回収数	有効回答数
1986.6	チーム責任者 A市	102	84(82.4)	84(100.0)
1987.9	B市	50	36(72.0)	36(100.0)
1987.11	C市	30	24(80.0)	24(100.0)
1986.6	チーム構成員 A市	1,500	1,562(76.6)	1,353(86.6)
1987.9	B市	800	646(80.0)	433(67.0)
1987.11	C市	700	671(95.9)	604(90.0)

()=%

- ③地域住民との仲間意識
- ④地域社会への愛着
- ⑤地域住民のまとまりに対する評価
- ⑥地域リーダーの活動に対する評価
- ⑦地域住民の相互扶助に対する評価
- ⑧地域住民の団結心に対する評価
- ⑨地域社会に対する同一感
- ⑩地域政治に対する関心
- ⑪地域行事に対する関心
- ⑫地域事業に対する関心

上記の12の質問項目に対する回答方法は、①該当する、②やや該当する、③あまり該当しない、④全く該当しない、という4段階の順位尺度のうち、1つを選択する方式になっている。

2)「地域行事への協力頻度」は、次の4種類の地域の年中行事へのチームの協力頻度を調査した。

- ①スポーツ大会・行事
- ②祭り・公民館の行事
- ③美化作業
- ④青少年教育活動

上記の4つの地域の年中行事へのチームの協力頻度を、①よく協力する、②たまに協力する、③あまり協力しない、④全く協力しない、という4段階の順位尺度を設け、この中から1つを選択する方法を採用した。

3)「チーム年間行事数」は、次のチーム年間行事の回数を合計した。

- ①チーム総数
- ②チーム内の親睦会

- ③他チームとの親睦会
- ④その他のチーム行事

4)「地域活動への自主的協力度」は、表2-2に示す質問内容に対し、①甲に近い、②やや甲に近い、③やや乙に近い、④乙に近い、という4段階の尺度を設け、この中から1つを選択する方法を採用した。

5)「チーム運営への自主的協力度」は、表2-3に示す質問内容に対し、①甲に近い、②やや甲に近い、③やや乙に近い、④乙に近い、という4段階の尺度を設け、この中から1つを選択する方法を採用した。

非調査者の「コミュニティ・モラル」の総計は、表2-4に示すように、12項目の質問内容に対する回答を得点化し、それを合計することによって表した。従って、「コミュニティ・モラル」の最高得点は48点になる。同様に、チームの「地域行事への協力頻度」の総計も、4種類の地域年中行事に対する協力頻度を得点化し、それを合計することによって表した。従って、「地域行事への協力頻度」の最高得点は16点になる。「地域活動への自主的協力度」と「チーム運営への自主的協力度」は、1つの変数によって表されるため、それぞれ4点が最高得点となる。

分析方法は、3つの隣接する地域のスポーツ集団の「コミュニティ・モラル」とコミュニティ活動の関係を比較した。A市については、6つの小学校区の個々の変数の平均値の相関係数を、B市とC市については、チームの個々の

表 2 - 1 分析に用いた変数と調査対象

変 数 名	調査対象
コミュニティ・モラル	チーム構成員
地域行事への協力頻度	チーム責任者
チーム年間行事数	チーム責任者
地域活動への自主的協力度	チーム構成員
チーム運営への自主的協力度	チーム構成員

表 2 - 2 チーム構成員の地域活動への自主的協力度を調査した質問内容

- 甲：私は地域の人たちとは進んで協力し、住みやすくするよう、できるだけ努力している。
- 乙：私は地域のことはあまりわからないので、よく知っている熱心で有能なリーダーにまかせた方が、かえってうまくいっている。

表 2 - 3 チーム構成員のチーム運営への自主的協力度を調査した質問内容

- 甲：私はチームの仲間たちとは進んで協力し、チームの運営が円滑に進むように努力している。
- 乙：私はチームの運営のことがよくわからないので、よく知っている熱心で有能なリーダーにまかせた方が、かえってうまくいっている。

変数の平均値の相関関数を算出することによって、「コミュニティ・モラル」とコミュニティ活動の関連を分析した。

結果と考察

1. 3市のコミュニティ・モラルとコミュニティ活動

表 3 は、「コミュニティ・モラル」と 4 つの種類のコミュニティ活動を得点化した平均値と標準偏差である。4 つの種類のコミュニティ活動を類別すると、まず、「地域行事への協力頻度」と「チーム年間行事」は、チーム単位の活動を表す変数であるため、フォーマルなコミュニティ活動、そして「地域活動への自主的協力度」と「チーム運営への自主的協力度」は個人的かつ自発的な地域社会への関与を表す変数であるため、インフォーマルなコミュニティ活動として類別することができる。

結果によると、C市の「コミュニティ・モラル」の得点が最も高く、次にA市、B市の順に続いている。これに対して、フォーマルな個々のコミュニティ活動の得点及び回数を見ると、「地域行事への協力頻度」の得点は、A市、C市、B市の順に高くなっており、また、「チーム年間行事数」は、A市、B市、C市の順に多いことを確認できる。そして、インフォーマルな個々のコミュニティ活動の得点結果によると、「地域活動への自主的協力度」の得点は、B市、C市、A市の順に高く、「チーム運営の自主的協力度」の得点は、A市とB市が同位であり、これにC市が続いている。

以上の結果によると、「コミュニティ・モラル」とコミュニティ活動は、ポジティブな関係を有していないことを確認できる。しかしながら、コミュニティ活動は個々の地域において、質的にも量的にも若干その様相を異にするものと考えられ、従って、地域ごとに 2 者の関係を見ていく作業が必要である。

2. コミュニティ・モラルとフォーマルなコミュニティ活動の関係

地方自治体の先導するコミュニティ形成施策は、小学校単位で進められていく関係から、3市において各小学校区別に「コミュニティ・モラル」と、個々のコミュニティ活動の得点及

表 2-4 各質問項目への回答の得点

変 数 名	4 点	3 点	2 点	1 点
コミュニティ・モラル	該当する	やや該当する	あまり該当しない	全く該当しない
地域行事への協力頻度	よく協力する	たまに協力する	あまり協力しない	全く協力しない
地域活動への自主的協力度	甲に近い	やや甲に近い	やや乙に近い	乙に近い
チーム運営への自主的協力度	甲に近い	やや甲に近い	やや乙に近い	乙に近い

表 3 各変数の平均値と標準偏差

	コミュニティ モラル		地域行事への 協力頻度		チーム年間 行事数		地域活動への 自主協力		チーム運営への 自主的協力	
	MEAN	SD	MEAN	SD	MEAN	SD	MEAN	SD	MEAN	SD
A 市	37.14	1.03	10.46	3.20	6.38	2.16	2.66	0.96	2.92	1.01
B 市	36.09	6.48	7.49	4.31	5.94	8.46	3.09	0.91	2.92	0.91
C 市	43.77	5.82	10.05	3.46	4.68	6.02	3.07	1.00	2.90	0.95

び回数の平均値を算出し、これらの相関を見ていくのが最良であるが、B市とC市に関しては、それぞれの小学校区において、サンプル数に差が生じてくるため、チームごとに5つの変数の得点及び回数の平均値を算出し、これらの相関を調べた。

まず、「コミュニティ・モラル」とフォーマルなコミュニティ活動の相関を見てみた。表4-Aは、A市における結果である。結果によると、「コミュニティ・モラル」と「チーム年間行事数」との間に正の相関が認められ、「コミュニティ・モラル」と「地域行事への協力頻度」、及び「チーム年間行事数」と「地域行事への協力頻度」との間には負の相関が認められている。

B市の結果では、「コミュニティ・モラル」と「地域行事への協力頻度」、そして、「地域行事への協力頻度」と「チーム年間行事数」の間にやや正の相関が認められた。

そして、C市の結果では、「コミュニティ・モラル」と「チーム年間行事数」との間に正の相関が、「チーム年間行事数」と「地域行事への協力頻度」との間には負の相関が認められた。

以上の結果より、A市とC市においては、「コ

ミュニティ・モラル」と「チーム行事数」との間には正の相関が認められ、「チーム年間行事数」と「地域行事への協力頻度」との間には負の相関が認められた、というのが共通する結果であった。

表 4-A

	地域行事への 協力頻度	チーム年間 行事数
コミュニティ モラル	-. 39	. 57
地域行事への 協力頻度		-. 34

表 4-B

	地域行事への 協力頻度	チーム年間 行事数
コミュニティ モラル	. 26	. 06
地域行事への 協力頻度		. 20

表4-C

	地域行事への協力頻度	チーム年間行事数
コミュニティモラル	. 06	. 38
地域行事への協力頻度		* -. 48

*
P < .05

表5-1及び5-2から、地域スポーツ集団の地域行事協力における行政機関との係わりを見ると、特に、このことはA市とC市に強い特徴であるが、「地域の年中行事」は、行政先導型のコミュニティ活動であるといえる。これに対して「チーム年間行事」は、行政機関との係わりを持たないチーム独自のコミュニティ活動である。従って、A市とC市の結果は、「地域の年中行事」と「チーム年間行事」は、その特徴を異にするという上記の見解を裏づける結果として見てよい。そして、B市の結果であるが、「地域行事への協力頻度」の平均値(7.49)によると(表3)、あまり地域行事との係わりを持たないチーム像が推測される。このことが、A市及びC市と異なる結果を提示した、1つの原因であると考えられる。

表5-1 地域行事への協力理由：A市

	行政機関からの依頼のため	連絡協議会からの依頼のため
N=84	25 (29.8)	33 (39.3)

() = %

表5-2 地域行事に協力する際の行政機関からの依頼の頻度

		よくある	たまにある	ほとんどない	全くない
B市	N=36	3 (8.3)	11 (30.6)	9 (25.0)	7 (19.4)
C市	N=24	6 (25.0)	16 (66.7)	1 (4.2)	1 (4.2)

() = %

3. コミュニティ・モラルとインフォーマルなコミュニティ活動の関係

最後に、「コミュニティ・モラル」とインフォーマルなコミュニティ活動の関係を見てみる。表6はその結果である。結果によると、個々の相関係数は、ほぼ近接した値であることを確認できる。例えば、各地域の「コミュニティ・モラル」と「地域活動への自主的協力度」の相関係数は、0.3~.41で正の相関が認められ、「コミュニティ・モラル」と「チーム運営への自主的協力頻度」の相関係数は、ほぼ0.2レベルで正の相関が認められ、そして、「地域活動への自主的協力度」と「チーム運営の自主的協力度」は、0.4レベルでの正の相関が認められた。

従って、「コミュニティ・モラル」とインフォーマルなコミュニティ活動の関係は、ポジティブな関係を有していると見てよい。つまり、「コミュニティ・モラル」の高い参加者ほど、個人的かつ自発的にコミュニティ活動に参加しているということである。この結果は、海老原や中島の仮説を支持する結果であった。

ま と め

本研究の目的は、3つの地域の比較により、地域スポーツ集団の「コミュニティ・モラル」とコミュニティ活動の関係を分析することであった。コミュニティ活動を、フォーマルなコミュニティ活動とインフォーマルなコミュニティ活動に分けて、「コミュニティ・モラル」

表6-A

	地域活動への自主協力	チーム運営への自主的協力
コミュニティモラル	. 37 **	. 26 **
地域活動への自主的協力		. 44 **

**
P < .01

表6-B

	地域活動への自主協力	チーム運営への自主的協力
コミュニティモラル	. 30 **	. 21 **
地域活動への自主的協力		. 47 **

**
P < .01

表6-C

	地域活動への自主協力	チーム運営への自主的協力
コミュニティモラル	. 41 **	. 27 **
地域活動への自主的協力		. 49 **

**
P < .01

との関係を分析したところ、以下のような結果を得た。

1) 「コミュニティ・モラル」とフォーマルなコミュニティ活動の関係においては、「コミュニティ・モラル」と「チーム年間行事数」との間には、正の相関が認められたが、この「チーム年間行事数」は「地域行事への協力頻度」との間で、負の相関が認められた。「チーム年間行事」はチーム独自のコミュニティ活動であり、一方、「地域行事」は行政先導型のコミュニティ活動であるため、2変数間に負の相関が生じたと考察された。

2) 「コミュニティ・モラル」とインフォーマルなコミュニティ活動の関係においては、「コ

ミュニティ・モラル」、「地域活動への自主的協力度」、「チーム運営への自主的協力度」の3変数間に、正の相関が認められた。特に、この3変数間の相関の中で、「地域活動への自主的協力度」と「チーム運営の自主的協力度」の相関が最も高かった。

上記の結果より、地域スポーツ集団のコミュニティ活動とは、チーム内での活動、あるいはチームを中心とした活動であることが考えられる。従って、構成員はチームを中心に、緊密なコミュニティを形成していると考えられる。我が国では、主として小学校単位にコミュニティ形成施策を進めていく地方自治体が多い。しかし、地域スポーツ集団の場合、こうした行政先導型の広い範囲のコミュニティ形成施策に関与する一方で、さらに狭い範囲のなかで、チーム独自のコミュニティ活動を展開し、チーム固有のコミュニティを形成していくものと考えられる。

参考文献

- 1) 海老原修, 江橋慎四郎, “コミュニティ・スポーツの社会的機能について”, レクリエーション研究, 8, p p. 41-50, 1981.
- 2) 金子守男, “地域スポーツ集団の社会的機能に関する研究”, 中京大学体育学研究科修士論文, 1987.
- 3) 金子守男, 守能信次, “地域スポーツ集団のコミュニティ活動に関する一考察”, レクリエーション研究, 17, p p. 13-20, 1987.
- 4) 金子守男, “地域スポーツ集団の親睦志向と勝利志向の関係”, 中京大学体育学論叢, 30-2, p p. 11-16, 1989.
- 5) 川西正志, “スポーツ参加のコミュニティ・モラルに関する研究”, レクリエーション研究, 14, p p. 44-50, 1985.
- 6) 国友宏渉, “スポーツのコミュニティ形成に関する実証的研究”, 名古屋大学総合保健体育科学, 10-1, p p. 77-89, 1987.
- 7) 守能信次, “わが町のとうちゃんソフトボール”, 月刊社会教育, 346, p p. 32-

- 37, 1985。
- 8) 守能信次, “地域スポーツ活動と伝統的地域集団の再編”, 体育の科学, 杏林書院, 7, pp. 497-500, 1988。
- 9) 中島豊雄, “地域社会におけるスポーツクラブの社会的機能”, 名古屋大学総合保健体育科学, 6-1, pp. 143-155, 1983。
- 10) 尾高邦雄, “産業社会学”, 経営全書, 1, pp. 251-299, 1958。
- 11) 李真, “地域スポーツ参加者の属性及びコミュニティ意識とその活動態様についての研究”, 中京大学体育学研究科修士論文, 1988。
- 12) Steve Dennis, Ervin H. Zube, “Voluntary association membership of outdoor recreationists: An exploratory study”, *Lisure Sciences*, 10, pp. 229-245, 1988.
- 13) 鈴木広, “コミュニティ・モラルと社会移動の研究”, アカデミア出版, 1, 1978。